

クリスマスイブ特集

平成 27 年 12 月 24 日 00253 号

編集者:佐藤 寿春

北見市幸町 8 丁目 4-4(佐藤整骨院内)

北見武道通信

NPO 法人北見市武道振興協会事務局発行

直通:090-5986-0839

代表:0157-22-2212 Fax:0157-23-0581

satou.toshiharu@navy.plala.or.jp

ニュースレター【事務局情報】

奇跡の実現！

北見市東陵中学校の武道必修がきっかけで柔道をはじめた、細川結加さんから、「裸足の体育」と題した寄稿を頂きました。

裸足の体育 細川結加（北見北斗高2年）

『初めて柔道に触れたのは、中学校の体育でした。自分は、体育の時間に裸足になることが新鮮で、まず、そこからその授業に楽しい印象をもった事を覚えてます。そこからだんだんと柔道に興味を持つようになっていって、高校で柔道をはじめました。実際に柔道をしてみると、重心だったりここを抑えたら相手は動けなくなるとか、身体のバランスや体の仕組みを突いた技があって、奥が深いです。これからは、もっとそういった技のことを勉強していって、試合に活かしたいです。また、柔道を通じて学んだことを、普段の生活でもうまく利用してみたいです。』



中学校の武道必修が始まった当初、一人の学校教育指導室主幹との会話で、「武道必修がきっかけで、柔道をやりたいという子が現れるといいですね」と語りかけたところ、「そんなことが起きたら奇跡ですよ」とバッサリ切られた時のことを思い出します。その奇跡を起こしてくれました。細川さんは、高校で柔道クラブに入部しましたが、指導者も部員もない中、唯一の柔道部員として、北見地区柔道大会に出場、準優勝の成績で1月20日の全道大会に挑みます。奇跡の実現を果たした細川結加さん、お見事！講道館柔道初段の証書も届き、真新しい黒帯がなお一層たのもしく見えてきます。

連載「武道宝鑑」第6弾 剣道の奥義を語る 高野佐三郎 大日本武徳会剣道範士

本篇は高野佐三郎範士を圍んでその剣生活七十年の体験より修得された、生きた剣の極意について教えられたものを問答体にまとめたものである。

問 それでは最初に『先』について御教えを頂きたいと思います。

高野 『先』も、ただ先といっても、滅茶苦茶に先を打つのは『先』ではない、で先ず『先々の先』について話しましょう。帝国剣道の形の一本目で上段に振り冠って進んで行く、あれが『先々の先』の使い方なのです。互いに間合いが進むまではどちらも先の手で行く。愈々三歩出て、初めてどこを打つという気が起きて行くのが『一つの先』愈々打って行くのが『二つの先』その『先』を知って打つから『先々の先』ということになるのです。敵の出て来るのを二つに数えてその『先』を打つから『先々の先』ということになります。『先々の先』というから、無茶苦茶に打つのが『先々の先』というわけではない、互いに『先』に進んで、愈々どこを打つということに出たのを一つの『先』に数えて、打ったのが二つの『先』、その二つの『先』を『先々』と数えて行くから『先々の先』というわけになります。次に『先』ですが、これは隙を認めて敵から撃ち込んでくるのを、敵の『先』が功を奏しない前に早くも此方が『先』を取って撃って勝つのです、敵からも懸るし、此方からも懸って行って、相対抗して先をかけて勝つので『對の先』とも申します。…つづく